

Title	小池基之教授と「経済表」の研究：小池基之著 ケネー「経済表」再考
Sub Title	Prof. M. Koike's studies on Tableau économique
Author	羽鳥, 卓也
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1987
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.80, No.3 (1987. 8) ,p.281(85)- 284(88)
JaLC DOI	10.14991/001.19870801-0085
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19870801-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



小池基之教授と「経済表」の研究

——小池基之著『ケネー「経済表」再考』
(1986年、みすず書房、vii+398頁。)—

〔I〕

本書の著者の、これまでの主要な業績が『水田』（1942年）、『日本農業構造論』（1944年）、『地主制の研究』（1967年）であったこと、また、著者がこれらの業績のなかで、「日本資本主義の基抵」は農業生産の諸関係、とりわけ土地制度にあったのであり、したがって、土地制度こそが日本の「資本主義の型をその深層において規定する」ものとみなされなければならぬ、という見解を、広範な資料の精力的な蒐集と克明な検討とを通して導き出し、この見解の確立のために並々ならぬ努力を傾注したことは、今もなお多くの人に記憶されている。

著者が長年にわたって研究の焦点に据えていたのは、現代日本の農業問題であった。けれども、本書の「あとがき」のなかで著者自身が述懐しているように、日本農業問題の研究に専念していた時にも、著者が「研究の理論的規準として、そこに立ち戻り、検討し、批判し、依拠したものは、……古典的経済学であった」。古典的経済学の研究へという著者の意欲は、すでに1953年に、著者をかりたてて、パリ国立文書館に所蔵される「ミラボー文書」のなかのケネー手稿を検討させた。本書に結晶する研究の出発点がここに与えられたのであった。それから約30年の月日を費やして、著者は本書を完成した。これは著者のライフ・ワークである。

本書の構成を一瞥すると、巻頭には「ケネー『経済表』刊本考」と題する序章がおかれてお

り、本論は、第1編『「危機」の経済学としての『経済表』』と、第2編「再生産論としての『経済表』の分析」とから構成されている。

著者は第1編では、コルベール期からケネーが生きた時代へかけての、フランスの政治的・経済的過程について克明な歴史実証的分析を企てて、ケネーの時代に陥った国家財政の危機の実態と、それに伴う絶対王政そのものの崩壊に瀕した危機的状况とを明らかにしたうえで、『経済表』執筆期のケネーがそういう現状の「危機」をいかなる観点からいかに認識していたか、またその打開策についてどう考えていたか、といった問題点をケネーの言説に即して明らかにすることに努めている。第2編では、著者は「経済表」の理論的分析を課題として設定し、はじめに「経済表」を構成する基礎的諸範疇について精密な検討を加え、ついで「経済表」の循環構造をめぐるさまざまな理論上の問題点を、従来の学界の研究成果に批判的検討を加えつつ考察している。

しかし、本書に結晶した著者の研究全体を導いた著者独自の問題関心は、「序章」のなかで最も鮮明に表明されており、ここには本書の核的主張が提示されているようにさえ思われるから、本書の紹介も、この「序章」を中心に据えて企てるのが適切であろう。ただ、内容の紹介にあたっては、特につぎの点に注意が払われなければならないだろう。すなわち、「経済表」の研究はマルクスが先鞭をつけて以来今日までに、内外を通じて夥しい成果を積み重ねるほどに進歩してきたのだから、今日著者が敢えて本書を世に問おうとした狙いがどこにあったのか、という点を明らかにすることに焦点を合せて紹介されなければならないということである。

〔II〕

「経済表」の研究は、マルクスにはじまる。マルクスは1846年刊のデール編『フィジオクラート』を利用して、「経済表」の分析を企てた。

ところが、マルクスがとりあげた「経済表」とは、上掲書に収録されたケネーの論説「経済表の分析」のなかに掲載された図表、つまり「経済表の範式」と呼ばれる図表であった。マルクスは「範式」のみを考察の対象としたのであって、ケネー自身が「経済秩序の基本表」と呼び、今日多数の研究者が「原表」と呼んでいる例のジグザグ表にも、「略表」や「略範式」と呼ばれている諸表にも全く言及することがなかった。

マルクスの死後、稀覯本である原典『経済表』の内容が次第に明らかになったが、1965年に、M. クチンスキーによって発見された『経済表第3版』が復刻・公刊されたことによって、『経済表』初版から第3版までの各版本の全容を確定するために必要な原資料が整備され、「経済表」の研究はここに新たな段階を迎えることになった。ケネー自身の著作『経済表』は、初版から第3版までのどの版本でも、「基本表」のみを掲載しており、その他の図表を収録してはいなかった。

しかし、この事実が明らかになった後にも、「経済表」の研究者の間では、依然として「範式」が研究の中心に据え続けられている。その理由は、研究者の間に、「基本表」は個別資本の規模での再生産を表示するものにすぎず、また「不生産階級」における「年前払」の回収を果しえず、したがって貨幣を当該階級内に滞留させるという欠陥をもっており、これらの点からみて「基本表」は「範式」に比べて理論的完成度の低い図表だという消極的な評価が定着していたためであった。

これに対して、著者は「基本表」こそが「経済表」研究の中心に据え直されなければならぬと提唱する。著者はつぎの諸事実を重視すべきだと主張する。

考慮すべき第一の点は、『経済表』の各版本間には改訂による若干の差異があるけれども、どの版本にも共通しているのは、この著作が「基本表」と「シュリー氏王国経済の抜粋」とから構成されているという点である。この「抜

粋」という表題をもつ論述は、「基本表」の表示するものに説明を与えつつ、王国の経済的繁栄を維持するための必要条件を列挙することによって、フランスの現状で繁栄の維持を妨げている諸要因を剔出し、コルベールティスムとの対決の姿勢を明示しながら、現下直ちに企てられるべき政治的・経済的改革の基本的方向を指示しようとする論述であった。してみれば、ケネー自身が1758—9年に執筆・印刷した著作『経済表』諸版は「抜粋」を不可欠の構成部分として収録することによって、フランスの現状に対する批判の書として書かれたものにほかならなかったものであり、「基本表」は現状批判に理論的基準を与えるべき図表として構想されたものだったのである。

第二に考慮すべき事柄は、ケネーは絶対王政再建の立場からする現状批判を果すために『経済表』を執筆・印刷したにもかかわらず、当時の当局の思想・言論に対する弾圧を怖れて、そのままの形での公表を断念したこと、またその公表を別の形で行ったことである。それはミラポールの著作『人間の友』および『農業哲学』のなかに収録されて公表されたけれども、ここでは「現実的課題にふれることをおそれて、純粋に理論的な取扱いにとどまるように深甚の配慮がなされ」たのであった。「基本表」の収入金額の数字が大きく書き換えられたことも、ケネーがフランスの現状に即して繁栄の条件を提示するという彼本来の課題の遂行を断念して、すでに最も繁栄した状態に到達していた王国を仮定して、理論的分析という限定された課題を果すためのものに変えたということの意味する。また、ここでは「抜粋」にも加筆・削除による若干の改訂が施されたが、この改訂も「抜粋」の、現状批判という本来の意図を隠蔽するためのものであった。

第三に考慮すべきは、つぎの事柄である。すなわち、「基本表」は「収入の支出と分配の結果」を概括的に表示する図表だったのではなく、あくまでも「過程を表示する」図表であったの

だが、この図表には若干の難解な箇所が含まれていたため、ケネーの学派の人々でさえ理解に苦しむほどであったから、ケネーは新たに「結果の概括表」を作成することによって「基本表」に補足説明を加える必要があると考えるようになり、前掲書『農業哲学』のなかには「略表」を、デュボン編の『フィジオクラシー』に収録されたケネー自身の論説「経済表の分析」のなかには「範式」を作成・掲載したという事実である。ただし、ケネーの論説「経済表の分析」は、同上書に収録される前にすでに雑誌論文として発表されており、しかも、初出の時には「範式」を収録していなかった。この事実は、ケネーが「範式」を前提にしてこの論説を執筆したのではなかったということの意味するだろう。

そして、「基本表」で6億と記されていた地主の収入年額が、「範式」では20億と書き改められたことも「範式」が最高度の経済的繁栄にすでに到達している王国を前提にして、社会的再生産の仕組をもつばら純理論的に解明するという課題の限定のもとで考案された図表だったということの意味する。

著者は「基本表」と「範式」とを比較して、両表の差異を指摘してこう主張する。「基本表」は、従来一部論者が主張したように、個別資本の規模での再生産を表示しているのではなく、社会的再生産過程を表示している。その点は、「シュリー氏王国経済の抜粋」の冒頭に記された一文から明らかである。「基本表」には100万分の1に縮小された数字が記されてはいるが、これはあくまでフランスの現状を念頭において、社会的再生産過程を描こうとした図表である。実際「基本表」は、生産物の生活資料としての消費、商品資本の生産資本への転化およびその生産資本による「純収入」の生産・再生産の総過程を、階級内の内部循環も含めて表示しようとした図表であり、だからこそ、ケネーは「基本表」を理論的基準に据えて現状批判を企てようとしたのであった。これに反して「範

式」は現状批判との直接のかかわりを喪失した単なる「収入の支出と分配の結果」に関する総括表にすぎないのであり、「基本表」の説明の便宜のためにケネーが考案した図表であったにすぎない。

こうして著者は、学界の有力な見解を批判しつつ、「経済表」の分析の中心を「範式」ではなく、「基本表」におくべきだと結論する。著者によれば、「経済表」の研究は、ケネー自身の著作『経済表』の決定版である第3版を中心に据え、「基本表」と論説「抜粋」とを一体不可分のものとして取り扱うことを通して果さなければならぬというのである。

〔III〕

評者はこれまでケネーの学説を学習する機会をもったことがなく、したがって本書の評者としての資格を欠いている。このことをお断りしたうえで、評者は著者の論述の迫力に圧倒される思いを抱いたということを付言しなければならない。評者には、著者の立論は周到に用意された文献上の証拠に裏打ちされて、すこぶる説得力豊かに展開されているように思われる。

ところで、菊版で約400頁という大著である本書には、上に紹介した論点のほかにも注目すべき論点が数多く含まれている。しかし、与えられた紙幅は制約されているから、以下には二つの論点を紹介するだけにとどめなければならない。

第1点。従来ケネー研究者の間では、ケネーが「基本表」を掲げながら、地主の支出の「裝飾の奢侈」への偏りが「純収益」を減少させ、その反対に「食料の奢侈」への偏りが「純収益」を増加させる結果を導くと付言していた事実にもとづいて、ケネーが構想した「基本表」のうちには、一方で縮小再生産過程を表示する「不均衡表」が、他方では拡大再生産過程を表示する「表」が不可分の構成要素として含まれていると考えられてきたのであり、その結果さ

まさに工夫された「不均衡表」の作成が試みられてきたのであった。しかし、著者の意見によると、ケネーが地主の支出様式の変差を問題にした時に関心を注いでいたのは「表」の秩序を攪乱して「純収益」の再生産を阻害する諸要因を剔出し、フランスの現状における問題の所在を明示することにあつたのであり、「拡大再生産」のメカニズムを理論的に解明することにあつたのではけつしてない、というのである。著者によれば、従来の「不均衡表」作成の試みは、ケネーの思想に内在する理論的展開になりえてはいないというのである。そのうえ、こうして作成された「拡大再生産表」は、素材補填・価値補填を果すことにおいて、両面ともに欠陥を露呈しており、したがって「拡大再生産表」の純理論的作成の試みとしてもけつして成功してはいない、というのである。

第2点。ケネーは富裕なフェルミエの経営に資本家的性格を認めるとともに、こういうフェルミエによる大経営を「経済表」における「生産的支出」の担い手として設定した。ところが、それにもかかわらず、「経済表」のなかにフェルミエが取得するはずの「利潤」が姿を現わすことは全くない。「経済表」における「純収益」は地代のみから成っており、そのなかに「利潤」は含まれていない。研究史上謎とされてきたこの問題については、従来からさまざまな説明が与えられてきたところだが、著者が本書で提示する解答は、この論点でも、著者に独自のものである。

ケネーは、富裕なフェルミエの大経営に資本家的性格を看取しており、したがって、フェルミエの経営によって「剰余」としての「利潤」

が産出されているということを明らかに認めている。けれども、彼は同時に、この「利潤」部分がフェルミエ自身によって生活資料として消費されてしまうと想定しているので、ここでは「利潤」は流過程にその姿を全く現わさないと考えているのであって、これが「経済表」のなかに「利潤」が表示されなかった理由だといっているのである。つまり、ケネーはフェルミエの経営によって生産される実際の生産額が「経済表」に記載された額よりも多いのであり、したがって実際の「純収益」の産出額もまた「表」に記載された額よりも多いと考えていたのだが、しかし、彼は同時に、この場合の差額である「利潤」部分がフェルミエ自身によって生活資料として消費されてしまうと想定することによって、流過程には「利潤」が全く登場しないと考えていたため、社会的再生産過程を表示する「表」から「利潤」を消去してしまったのだ、というのである。

本書には、従来の学界の有力な見解と真向から対立する所見が随所に提示されている。しかし、著者の批判的所見は、一方では周到な文献上の考証と丹念な資料の検討とに裏づけられ、他方では強靱な思考力に支えられた精密な推理を通して提出されているから、著者の所見に異論を抱く論者も、本書がこの研究領域における近年の最大の収穫であるという最大の評価を与えることを拒みはしないだろう。評者は、今後ケネー研究者の間で、本書をめぐる、論争が活発に、かつまた実り豊かに展開されることを期待したい。

羽鳥卓也

(関東学院大学教授)